

～実際にあったお話です～

幸田町で家を建てたお客様のお話です。

家が完成したのは2000年です。それから10年後、ご主人は命にかかわる大病を患いました。

病院に入院して横たわるベッドの上で、不安と闘いながら人生を振り返ったそうです。

家を建替えたのが50歳の時、かかる費用の大きさからやはりどうすべきか随分と悩んだそうです。それまでの家に住み続ければ、大きなお金を使わなくても済み、残りの人生を、余裕を持って海外旅行や趣味などで楽しむことが出来るからです。

熟慮した結果、家を建替えることを選びました。

人生を振り返って、次のように思ったそうです。

「俺、病気になって分かったよ」

「あの時迷ったけど、今の家を建てて本当によかった」

「あの家は俺が生きた証として、唯一残すことの出来るものだよ」

「もしものことがあっても、俺が造った形あるものが残せるんだ」

ご主人にとって、思い入れが深い家は別の形をした自分自身ではないでしょうか。

命のかかわる病の中で、心から思った真実です。

生きた証としての家が、最も自分を認めてくれるものになるのだと思います。住む人と一緒に人生を歩んでくれる、大切な存在です。